

「人生はまごころで」 - 宇喜田に嫁いで70年 -



う だ が わ
宇田川 ふさ

1918年(大正7年)
東京都文京区生まれ
宇喜田町在住

vol.16
2013年
6月



江戸川区
聞き書き
研究会

聞き書き研究会とは、江戸川区で生活し、江戸川区を愛し、強く逞しく生きた女性の姿を江戸川区女性センターの区民ボランティアが「聞き手」となって編集し、文書として残すための活動です。

制服に憧れ、女子師範へ

大正7年、東京の小石川区(現文京区)大塚で生まれました。父は建築業でした。おおらかな人で、子どもにはたいへん甘かったです。母はとても勉強家で、いつも本を読んでいた。叱られたこともあんまりないし、束縛もしない、やさしい母でしたね。

4人きょうだいで兄とは3つ、弟とは2つ違い。妹は、大正12年の関東大震災の年に生まれた震災っ子です。母方の祖父母がクリスチャン、母もクリスチャンでしたので、わたしたちは生まれるとすぐ神田のニコライ堂で洗礼を受けさせられました。

幼児期はクリスチャンの幼稚園に通い、小学校は大塚^{じんじょう}尋常小学校に行きました。みんなでよく、竹馬や馬跳び、ドッジボールをしたり、お手玉、おはじき、紙風船で遊んだりしたわ。遊びはどっこもだいたい同じよね。

わたしは小学生のころから、小石川区の竹早にある東京府女子師範学校(現東京学芸大学)に入りたかったの。ただもう、あの制服と学校に憧れて。制服はセーラー服。胸当てのところに線が入っていないのが特徴で、襟と袖口の蛇腹線だけが白かったの。

あの時分、女子師範は受験が難しいと言われたけど、ただがむしゃらにね。なぜかそのころは、勉強が好きだったから、ちっとも億劫^{おっくう}じゃなかったわね。4年生になると上に進みたい人には、先生が教えてくださる放課後予習というのがあったんです。昔はね、塾なんて無かったから、それに残ってやっただけ。長女ですから妹たちの面倒もよくみまし、母の手伝いもしましたよ。

小石川高等小学校の後、憧れの女子師範に入学して、5年間超一流の先生方から全ての科目を教えていただきました。音楽はピアノ、裁縫は付け下げまで縫い、大工のようなこととして本箱や茶筌^{ちやだんす}も作りましたね。特に好きだったのは体育です。ブルマ姿でやりました。専攻のバスケットボールで神宮外苑の球場で対抗戦もしましたよ。

卒業して、王子区立(現北区)の第三岩淵^{いわぶち}尋常小学校に勤めました。進学校として有名で、北区の学習院って言われるいい学校でした。進学のために越境入学して来る生徒さんもけっこういて、親御さんの熱心さに応えるよう

わたしも夜遅くまで勉強しました。体育も手芸もなぎなたも全科目教えましたよ。

ポロツと落ちた一枚の写真

主人との出会いは面白いのよ。わたしの同級生のご主人がうちの主人と仲良しだったんです。主人が、もうそろそろ結婚したいなと言うので、わたしの友だちがアルバムを出して、先輩や同級生の写真を見せていた時、ポロツと1枚落ちたんですって。それがわたしの写真だったんです。「その人がいい」と言うので、お見合いすることになった。浅草など下町を案内してもらったり、夏は日帰り千葉県の富浦^{とみうら}に行ったりしました。

昭和18年に主人が29歳、わたしが24歳で結婚。明治記念館で挙式しました。もんべを穿^はいて式場まで行って、向こうでかつらと黒留袖に着替えをしてね。戦争中でしたから、新婚旅行は行かなかったの。母はわたしをお嫁に出す時、長男だけは嫌だ、苦勞が多いからと言っていました。だから、母も次男に嫁いだんですね。宇田川家は旧家と知っていましたが、主人は長男じゃなくて3男だったし、見合い恋愛でしたから。

はじめは、主人が日本鋼管に勤めていて近いから、渋谷区松濤^{しょうたう}のアパートに住んでいました。そこから主人が出征したので、義兄に呼ばれて宇喜田に来たんです。職場が遠くなったので、葛西尋常小学校に勤めました。戦争中でしたので、もしものことがあった時に、職業があったほうがいいかなと思って、辞めないでいたんです。終戦になる前に、主人が傷病兵となって帰還して、子どもが生まれる前に勤めを辞めたの。

なぜ辞めたのかとみんなに訊かれ、「キューリー夫人を見習え」って弟にも言われましたけどね。わたしは、なぜかお金で買えないものを失うような気がしちゃったの。お勤めしていると、お金は入りますけどね。お金では買えない何か、愛情だけではないわよ、嫉^{しつ}にしても何にしてもすべて、そういうものが失われるような気がして、きっぱり辞めちゃったの。

助産婦さんに勧められて、父の実家がある神奈川県津久井湖^{ついきいこ}のそばに疎開して、昭和20年6月に長男を

出産しました。戦後、本家の角に長屋が2軒建ててあったので、そこに呼び戻されました。それで結局、住み着いちゃったわけ。住まないつもりでいたんですけどね。

しました。みなさん和気あいあいとして、楽しかったわね。授業を終えたあとのちょっとしたお茶飲みでは、ご自分の家のことやお漬物の作り方でぎっぴらんに話しあって。お互いに世間が広くなり、いい社会勉強になったわね。

何ごとにもまごころで

こちらに来て間もなくの昭和23年、小松川警察署の管内に「母の会」ができました。青少年の育成や不良化防止のために、子どもを直接指導するのではなく、母親を通して指導する会。日本舞踊坂東流名取の内田時子さんが会長、わたしは十軒町（現葛西地区）の副会長で、いろいろなことをご一緒しました。だけどわたしは家庭が中心でしたから、役員会があっても3時っていうと必ず帰って来たの。講演会、親睦会、旅行と、お母さんたちに声をかけると喜んで参加してくださったわ。

宇喜田にありがとう

宇喜田に来た当初は、涙が出るほど淋しかったです。川と田畑に囲まれて、辺鄙で疎開して来るような所でしたから。日が暮れるとまったく人の気配がありませんでした。ここは、宇田川家の先祖が江戸時代のはじめに、葛西の葦原を開墾したんです。宇喜田という地名は、宇田川喜兵衛の宇と喜をとって付けたそうですよ。

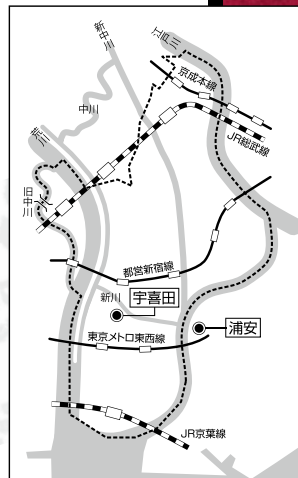
その先祖が建立した子育て地藏尊が、宇喜田十軒自治会館内に安置されています。毎月23日に念仏地藏講をやっているんですよ。朝の9時半から、まず経本を読み、鉦を叩きながら「南無阿弥陀仏」と念仏を100回唱え、また経本を読みます。11時ごろまでね。その後は、食べ物などを持ち寄っての団欒ですね。昔から地元の婦人が引き継ぎ、今は10人ばかりで大事に守っています。この地藏講は江戸川区の無形民俗文化財にもなっているんですよ。

昭和20年ごろ、水道はありましたが、ご飯を炊く、お風呂を沸かすのは、すべてが薪なのでもうびっくりしました。そのころの宇喜田は半農半漁。田んぼや畑が広がり、海苔がいっぱい干してあり、小舟が新川を行き来していました。女性は威勢が良かったですね。着物の裾を尻っぽして、自分を「オレ」って言っていました。魚や佃煮などのお惣菜は浦安から売りに来て、ワタリガニは美味しかったですよ。

これまでにわたしが一番輝いていたのは、子育ての時期でしたわ。編み物が好きだから、セーターに編み込み模様で動物、電車なんかを入れると、息子に「お母さん、僕、男だから何にも付いていないのがいい」なんて言われたりしました。家の中で何かやるのが好きで、家庭に生きがいと幸せを見つけたのね。わたしには、結婚は家庭を創ること、子どもや主人に尽くすことという信念がありましたしね。

主人は平成9年に83歳で亡くなりましたが、男性としては長生きのほうでしょうね。家庭を大事にしたご褒美か、新婚旅行に行かなかったからか、主人は定年になってから、日本中旅行に連れて行ってくれました。いい主人でした。

わたしは今、何ごとにも力を尽くした人生に満足しています。日本中どこに行っても、やっぱりここに帰って来るとホッとします。宇喜田に近づくと空気が清々しく美味しく感じます。宇喜田よりいい所は無いですよ。



◆セーラー服姿の宇田川さん(上)
◆ポロツと落ちた一枚の写真(左)

母の会を辞めた後、昭和45年に民生委員をお引き受けしました。障害のある方とかお一人暮らしの方を訪問したり、区役所からの敬老金を配ったり。その時分は、十八軒町のほうまで受け持っていましたから、敬老金を配るのが一番大変だったわね。息子がお休みの時には車に乗せて行ってもらったりしてね。主人が定年になった後、できるだけ家庭にいたかったけど、民生委員はけっこう用事がありますからね。13年やって、辞めさせていただきました。

民生委員をやっていた昭和48年に、地域の「くすのきクラブ」を作るお手伝いをしました。当時、町会ごとに60歳以上の方が50人以上集まると、くすのきクラブの会を作れたんです。町会長さんと一緒に歩いて、「くすのき十軒長寿会」という名前の会がすぐにできました。区の行事に参加したり、レクリエーションやリズム運動をしたりするんです。わたしも十軒長寿会に入って、会計や副会長のようなことを長い間やったけど、88歳になった時に若い人と交代しました。今でも活動には参加して、健康のために週1回のリズム運動もしていますよ。

昭和54年10月に葛西いきがいセンター（現くすのきカルチャー教室）が近くの三角にできた時も、みなさんをお誘いしました。江戸川区の60歳以上の人のための文化事業で、わたし自身も書道、英語、アートフラワーなど20年間くらい参加